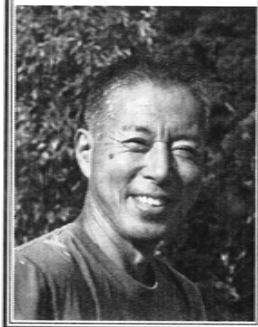


「守るべき日本」を浸食してきた アメリカと市場

熊野飛鳥むすびの里代表 荒谷 卓



わが国は主権国家ではない

一九五二年にサンフランシスコ講和条約が発効し、わが国が主権を回復してから七十年が経ちます。しかし、未だに日本はアメリカへの依存を続け、独立国としての気概を失ったままです。

荒谷 国民は「アメリカに依存する以外に日本の生存の道はない」と信じ込んでしまっているのです。第二次安倍政権で成立した「平和安保法制」には、「米国が攻撃されると日本の存立が脅かされる」とする「存立危機事態」という概念が書き込まれました。それほどまでに、「日本はアメリカなしには存立できない」という考え方が浸透してしまっているのです。

政府、経済界、メディア、御用学者たちは、中国や水資源までも売り渡そうとしているのも、主体的選択肢を自ら放棄しているが故に彼らの要求に逆らえないからです。

—— 日米地位協定によって日本の主権は踏みにじられています。

荒谷 まさに治外法権を明文化しているのが、地位協定です。日本との講和交渉のために来日した国務省顧問ジョン・フォスター・ダレスは、一九五一年一月に「我々は日本に、我々が望むだけの軍隊を望む場所に望む期間だけ駐留させる権利を獲得できるであろうか」と語っていました。このダレスの言葉に象徴されるように、アメリカは日本のどこにでも基地を置くことができるのです。

わが国は、ロシアとの間で北方領土問題を抱えています。日本政府は「北方領土には米軍基地を置かない」と約束することさえできないということです。これが、領土問題の解決を妨げている大きな理由です。つまり、日米地位協定によって、わが国の主体的な外交が阻害されています。わが国は主権国家ではないということなのです。

北朝鮮の脅威を取り出して、「日米同盟に頼る以外に道はない」と主張し、自主防衛の努力を怠ってきました。

しかし、現下の世界情勢は、まさに人類史における革命的大転換期にあります。もはや、日米関係のみに固執する時代ではありません。自立した思考と判断で日本の将来を創造しなくてはなりません。

アメリカに頼るしかないと思込んでしまっているため、日米関係を維持することが自己目的となっているのです。その結果、日本政府はアメリカ、正確にはアメリカのグローバルリストの言いなりになっています。こうした状態は独立国とは言えません。日本政府がグローバルリストの要求に屈して、日本の農業、林業、

守るべきものは「日米安保体制を基軸とする戦後憲法体制」ではない

—— 東西冷戦の終結、ソ連邦の崩壊は、日米安保条約を見直し、わが国が自主防衛に転換する好機でした。しかし、わが国はそれを活かすことができませんでした。

荒谷 世界各国は、冷戦終結とソ連邦崩壊を受けて、軍の任務を見直しました。例えば、ドイツでは五十二万人体制から三十七万人体制への兵員削減や徴兵制度見直しなどにより、新世界秩序構築のための安定化任務に適合した少数精鋭のプロフェッショナルな軍隊へと転換を図りました。しかし、わが国は国際環境の変化に対応した戦略の見直しも行わず、自主防衛への転換の意志も示そうとはしませんでした。

冷戦終結によって、アメリカの対ソ封じ込め政策は終結し、日米同盟の存在意義も消滅したはずですが、しかし、冷戦終結によって世界の構造がどう変化するのかをまともに議論しないまま、わが国は日米同盟にしがみついたということなのです。

冷戦終結によって、対ソ戦略上の日米同盟の存在意

義がなくなったにもかかわらず、アメリカがその存続を望んだのは、日米地位協定をはじめとする日本における既得権を維持し、冷戦時代に稼がせた日本の資産をすべて収奪しようと考えたからでしょう。

一方、わが国は「日米同盟は永遠に不滅だ」「日米同盟がなくては日本の安全は保障できない」などという無思考・無作為に陥り、日米安保をそのまま存続させたのです。対米従属によって利益を享受してきた人たちの「既得権」が優先されたのかもしれない。

もともと、アメリカの初期対日占領政策は日本弱体化政策でしたが、東西冷戦の勃発に直面したアメリカは、グローバリストのシンクタンク外交問題評議会の刊行誌「フォーリン・アフェアーズ」に掲載したジョージ・ケナンの「X論文」の主張に沿ったかたちで、日本の経済復興、再軍備政策に転換しました。日本の再軍備の経緯を振り返ると、日本政府が自発的に軍事力を再構築しようという意図を持った形跡は全くありません。

一九五〇年六月の朝鮮戦争勃発を受け、日本はマッカーサー書簡によって、陸上自衛隊の前身となる警察封じ込めと同時にドイツを抑える意味がありました。野村吉三郎が米海軍のプラット提督に宛てた書簡には、「新憲法は無血革命と言えるかもしれない」と書かれていました。日本人の中には、マッカーサーによる占領を有難がり、マッカーサーがアメリカに帰国することを非常に残念がった人もいました。彼らは、占領体制の継続を渴望していたのでしょうか。こうした人たちが守りたいのは、伝統的な日本ではなく、マッカーサーの無血革命によって作られた社会なのです。つまり、彼らの言う「国防」とは、日米安保体制を基軸とする戦後憲法体制を守ることなのです。

グローバリズムを守ろうとする「保守派」

「保守」と呼ばれる人たちも、守るべきものがあるを見失っています。

荒谷 三島由紀夫が『文化防衛論』を著したのは、本来の守るべき日本を明らかにするためでした。日本人が守るべきものは、日本の歴史、文化、伝統です。その歴史、文化、伝統を破壊してきたのが、グローバリゼーションなのです。「守るべき日本」を浸食してき

予備隊の設置を告げられました。そして、ポツダム勅令を根拠に国会の議論も一切ないまま、再軍備が開始されたのです。戦前に駐米大使を務めた野村吉三郎はアメリカの意図をくんで、海上自衛隊の前身である海上警備隊の創設を日本政府に働きかけました。海上警備隊は米軍の一部として創設されたのです。サンフランシスコ講和条約後には、米軍の提案によって航空自衛隊ができました。

つまり、日本の再軍備・防衛体制は、すべてアメリカの要請によって進められてきたということなのです。日本占領は七年間で終わり、GHQは解体されましたが、彼らはワシントンに引越して日本占領を続けたということです。

日米安保は対ソ封じ込め戦略に基づくものでしたが、同時に日本を抑える意味もありました。例えば、一九九〇年に在沖繩アメリカ海兵隊司令官ヘンリー・スタックポール少将は、「アメリカ軍が日本から撤退すれば、既に強力な軍事力を日本はさらに増強するだろう。我々は『瓶のふた』のようなものだ」と発言しています。北大西洋条約機構(NATO)にも、対ソ

た最大の脅威は、アメリカであり、市場であることに、早く日本人は気づくべきです。それに気づきさえすれば、なぜ日本がアメリカから自立しなければならぬかが理解できるはずです。

かつて、日本は英米が主導するグローバリズムと戦い、アジア諸国をグローバリズムから解放しました。しかし、終戦後の七年間に及ぶ米軍占領下に、日本はグローバリゼーションの側の手先と化してしまったのです。自分たちが何を守ろうとしていたのか、自分たちが何と戦っていたのかを完全に忘れてしまい、日本人が命をかけて守ろうとしていたものを日本人自らが破壊しているのです。まさに戦後体制とはグローバリズムであり、いまや「保守」と呼ばれる人たちが、グローバリズムを守る側に立っているということなのです。

守るべき日本が見えなくなっているのは、日本人が国体観を喪失してしまったからだと思います。荒谷 日本人が国体観を取り戻せば、現在の日本が本来の姿ではないことがわかります。

上皇陛下が、平成三十年八月八日、ご在位中に渙発したお言葉(みことのり)には、「国内のどこにおい

でも、その地域を愛し、その共同体を地道に支える市民の人々のあることを私に認識させ、私がこの認識をもつて、天皇として大切な、国民を思い、国民のために祈るといふ務めを、人々への深い信頼と敬愛をもつてなしたことは、幸せなことでした」とありました。

恐れ多くも上皇陛下は、こうしたわかりやすい言葉によって、現在の日本国民に、「しろしめす」ということを説明されたのだと思います。「しろしめす」とは、人々の心情を御知りになるということです。そして、その人々が祖先から継承する伝統文化を尊重し、人々の弥栄のために、天皇は一日も欠かすことなく朝に夕に全身全霊で祈りを奉げられるのです。そのような天皇に感謝し、大御心に少しでもお応えしようとする国民が、一体となって国を築いているのが、日本の本来の姿なのです。日本国民は、自ら生きる土地と伝統的共同体を地道に支え、自らが日本文化そのものによって生きていくことが大事なのです。そのことにより、天皇のしろしめす大御心と国民の思いが一つになり、守るべき日本自体が顕現されるのです。

—— 公教育によって国体観を回復することはできる

は、米軍から上陸用舟艇三十隻を含む艦艇百四十四隻の無償貸与を受けなければ千島列島に侵攻できませんでした。中国が日本に侵攻しようとしても、自衛隊は十分にそれを阻止できます。中国脅威論を煽り立てる前に、中国が日本を占有するような能力を持っているのかを、客観的に分析すべきだと思います。

しかも、日本人が「戦闘民族」であることは世界的に認識されています。私がドイツに留学していたとき、テレビ番組で神風特攻隊を扱った番組が頻繁に放送されてきました。不思議に思ってたドイツ人に訊ねると、「カミカゼは我々ドイツ人の歴史的な経験を遥かに超えた、インパクトのある出来事だから、取り上げられているのです」との説明が返ってきました。それを聞いていたほかの国の将校たちは「日本は、今はアメリカに尻尾を振っているが、いざとなれば日本人はやる」などと語っていました。戦前の日本人の戦いぶりは、強烈に世界中の人の脳裏に焼き付いていて、日本人はいざとなれば徹底的に戦ってくるという畏怖の念を抱いています。わが国に欠けているのは、「自分で自分の国を守る」という意志だけです。

でしようか。

荒谷 歴史を振り返ると、国体観を取り戻す上で重要な役割を果たしてきたのは、私塾だったと思います。特に幕末の志士たちは、志のある師のもとに集まって学び、日本のあるべき姿に目覚めました。現代においても、学校で学ぶよりも、志ある師に学ぶことの方がよほど重要なことを学べるのではないでしようか。

中国にはわが国を占有する能力はない

—— 日本がアメリカから自立するためには、自主防衛体制の確立が必要です。

荒谷 自主防衛体制を固めるためには、敵基地攻撃能力など自衛隊の防衛力を強化する必要があります。ただ、幸い日本は島国ですので、他国が日本を攻めようとすれば、海から日本に上陸するしかありません。陸上戦力のパワー・プロジェクト（海外に投入する）能力を持たない限り、日本を占領することは不可能です。大東亜戦争においても、アメリカ軍でさえ日本との本土決戦は極めて困難だと考えていました。ヤルタ会談で米英にそそのかされて対日参戦したソ連軍

—— 有事の際、日本の民間人が武器をとって戦うことはできるでしようか。

荒谷 危機になれば、どの国でも市民によるレジスタンスの動きは自然に起こってくるものです。日本では、この問題を議論すること自体が避けられています。が、軍隊の教育は、通常二、三カ月あれば可能です。危機の際に国民の中からレジスタンスの意識が芽生えれば、数週間、民間人が軍隊のような戦闘集団になることは可能です。しかし、そのためには国民が一丸となって戦うという気持ちを持つ必要があります。

—— 自主防衛の確立には、日本の防衛産業の強化が必要で

荒谷 防衛装備の開発で日本ほど潜在力のある国はほかにありません。日本にはセンサー技術や素材技術など非常に優れた技術があります。日本の防衛産業が本気で取り組めば、優れた防衛装備を開発することができます。かつて、わが国は世界最高の航空機を製造していました。

しかし、現在わが国が航空機産業を発展させられないのは、日本の技術力が理由ではありません。米国が



それを許さないからです。こうした状況を変える必要があります。

「熊野飛鳥むすびの里」が目指すもの

—— 荒谷さんは、どのような思いで「熊野飛鳥むすびの里」に取り組んでいるのですか。

荒谷 私は、官僚を長く務め、「戦後体制の中からでも変化は起こりうる」という期待感を持ちながら、自立した日本を目指してきました。しかし、結局戦後の政治体制自体が、それを許さないことを痛感しました。強い管理下に置かれている実態がわかったのです。

そうした経験から、政府の力に頼らず、民間人が日本の価値を再認識する活動を展開していく中でしか、日本の国体の回復はあり得ないと考えたのです。私は、上皇陛下のみことのりに従い、自ら実践することを決意し、平成三十年十月に三重県熊野市飛鳥町に移住しました。「むすびの里」では「農」、「学」、「武」を三本柱としています。共助共栄を「農」で実践し、日本の伝統秩序を「学び」、それを継承し、大丈夫の気概を「武」で体得して和を守るといふことです。

古の共同体を運営してきました。自然発生的に生まれたのが、わが国の共同体文化です。共同体文化は、言葉ではなく実体験から感じ取るべきものであり、稲作による共同作業を実体験するのが最も良いと思います。しかも、農業を通じて日本人が失いつつある様々な感覚を取り戻すことができます。

例えば、田植えをすれば、田んぼを開墾し山から水を引いてくる水路を整えてくれた先祖の努力に、我々が支えられているということが実感できます。また、

ところで、イスラエルの首相を務めたダビッド・ベングリオン氏の回顧録『ユダヤ人はなぜ国を創ったか』には、国を失ったユダヤ人が、なぜ再び国家を回復することができたかが書かれています。ベングリオン氏は三つの理由を挙げています。(一) 民族としての歴史を知るといふ意識の高まり、(二) 自分たちの土地、地面で生活することが民族としての使命だと信ずる体験をしたこと、(三) ヨーロッパで革命が起きて、世界的な大転換期を迎えたこと——です。我々が「本来の日本」を取り戻す上で、この三要件は参考になります。まず日本人は、自分たちの歴史、国体を学ぶ必要があります。

現在、日本人は国生みの神々が作った土地で生きていくという感触を失っています。だからこそ、熊野のような日本的な風土が残っている土地で、土を耕し、農作業をすることによって、皮膚感覚で日本人の生き方についての記憶を蘇らせることができると思っています。世界的な大変革が進行している現在は、伝統的日本人を回復する絶好の機会なのではないでしょうか。

日本人は、天孫降臨以前の縄文の時代から、世界最

農業は人間の力だけではうまくいかず、自然環境に大きく左右されます。それを知れば、人間は自然との関わりの中で生きていくしかないということが実感できます。つまり、農業を通じて、日本人が自然に感じ取ってきた、先祖との関係や自然との関係を体験的に認識できます。そうすれば、人為的、人口的に作られた価値がいかにちっぽけで、つまらないかがわかるはずです。

—— 武道を学ぶ意味はどこにあるのでしょうか。

荒谷 「武」は本来「む」であり、創造、生産を意味する「産霊」の「む」です。つまり、造化三神の活動を継続することが「武」の本質なのです。また、「和」を維持するためには、「和」を大切にすると、「和魂」と、「和」を乱す者に対しては勇気をもって戦う「荒魂」の両面が必要です。つまり、武道を通じて、荒魂の文化を発揚できる人材の育成しようとしているのです。

日本が真の独立を回復し、本来の姿に戻るためには、日本の文化価値を守り、それを体現できる活動が必要です。そのために、七生報国を祈願し力を尽くしてまいります。